

聖書：マタイ 21：1～11

説教題：ろばの子に乗る王

日時：2020年2月9日（朝拝）

イエス様は今日の箇所でいよいよエルサレムの都へと入られます。イエス様はここで一つの行動を取られます。それはご自身を「王」としてお示しになることです。イエス様はこれまで決して人々の前でそのようなことはされませんでした。人々がイエス様のみわざを見て、王に祭り上げようとした時も、それを退けて群衆から離れて行かれました。しかしエルサレムを目前にして、ついにその時が来たことを知られて、自らそのことを示す行動を取られたのです。

そのためになされたことは、まずろばの子の調達です。イエス様はこう言って二人の弟子を遣わされました。2～3節：「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばがつかがれていて、一緒にろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどいて、わたしのところに連れて来なさい。もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」これは一体どういうことでしょうか。この後を読むとわかりますように、事はスムーズに展開します。何の問題も起こらなかったようです。すべてはイエス様がここで言われた通りに進みます。ここを私たちはどう理解したら良いのでしょうか。ある人はイエス様はこの日のために事前準備をしていたのだろうと見ます。前回見たエリコでの出来事を経てエルサレムの都に入るまで、イエス様はエルサレム郊外の村、ベタニアに数日間とどまったことがヨハネの福音書から分かります。イエス様はその数日間の中に、ろばの持ち主に予約を取っていたのだろうということです。「主がお入り用なのです」という言葉は、そのための合言葉、パスワードであったというわけです。だから物事はスムーズに進んだのだと。またある人はイエス様はこれまでも何度かエルサレムに来たことがあって、イエス様に心寄せる人たちが多くエルサレム周辺にいたのだろうと見ます。そこで今回、特に事前予約まではしてなくても、「主がお入り用なのです」、すなわち主イエス様が必要としていますと言えば喜んで協力してくれる人たちがいた。そのことを前提にして今回のことはなされたという見方です。またある人は、これは全くイエス様の超自然的なみわざであると見ます。向こうの村に行けば、すぐそこにろばとろばの子がいることをイエス様は予見しておられた。またその持ち主の心を支配し、その人が喜んで差し出すように導くことがおできになった。そのような神としての奇跡的なみわざをこれは示していると。結論から言うと、

これのどれであるかははっきりしません。注解者たちの意見もバラバラです。後に過越の食事の準備の時にも似たような出来事が起こります。弟子たちがイエス様に言われた通りにすると、何と席が整って用意ができていたという場面が出て来ます。一体これはどういうことかと私たちはそこでも同じような問いを発したくなります。いずれにしてもはっきりしていることは、イエス様ご自身がこのために働かれたということです。イエス様はエルサレムに入る時、たまたまろばの子を見つけて、それに乗られたのではありません。成り行きでそうなったのではありません。イエス様は明らかな意図をもってろばの子をこのように調達されたのです。そしてそれに乗ってエルサレムの都に入城することによって、大事なことを弟子たちに、また今日の私たちに、目に見える形で現そうとされたのです。

ではイエス様がこのようにされた目的は何だったのでしょうか。それは4節に「このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった」と書かれています。そして5節にゼカリヤ書9章9節が引用されています。「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」ここに神が送ってくださる王なるメシヤはろばの子に乗って来ると言われています。これにはどんな意味があるのでしょうか。それは引用元のゼカリヤ書を参照すると、もっと分かりやすいと思います。ゼカリヤ書9章9～10節：「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る。」ここにゼカリヤが預言する王は、この世の王と全く違うことが示されています。この世の王は、10節に記されている通り、「戦車」や「軍馬」や「戦いの弓」を持つことをその特徴とします。彼らはそれによって自分の力強さを見せつけ、人々を圧倒する仕方で現れます。他者を権力でねじ伏せ、屈服させ、逆らう者たちを滅ぼして自らの帝国を築きます。しかし神が遣わす王は、この世の王たちと全く異なります。その方はろばに乗って来ます。しかも子ろばに乗って。王が都に入城する際、ろばに乗って入る光景を思い浮かべるなら、それはあまりに滑稽ではないでしょうか。情けない姿、恥ずかしくて笑われてしまいそうな姿。しかしメシヤはろばに乗って来ると言われています。9節に、この王は「義なる者で、勝利を得、柔和な者で」と述べられていますが、マタイの福音書では先の二つのことばは省略され、「柔和な方で」という言葉に特に焦

点が当てられています。そしてゼカリヤ書の「柔和な者で」という部分には印がついて、欄外を見ると、あるいは「へりくだった」と記されています。つまり神が遣わすまことの王は柔和な王、へりくだった王なのです。この方は軍馬に乗るのでなければ、恥ずかしくてとても人々の前には出られないとは言わない。もっと立派な車に乗るのでなければ私は我慢ならないとは言わない。この方はろばでOK。ろばの子でOK。しかもマタイの福音書では「荷ろばの子」と言われています。最も低い状態にあるものです。それで良しとされる。しかしこんな情けない姿で現れる王が、どのようにしてゼカリヤ書9章10節で言われているように、戦争をやめさせ、諸国の民に平和をもたらすことができるのでしょうか。王はやっぱり力と富と圧倒的な武力を持ってこそ、世界をうまく支配できるのではないのでしょうか。しかしイエス様はそのような王とは違うということが語られています。イエス様はここでゼカリヤ書の預言に従って、ろばの子に、しかも荷ろばの子に乗って行進されました。これはこの方が卑しき、みじめさ、また辱めを何とも思わず、ご自身の上に引き受けられたことを示しています。私は王なのだから、こんなみじめな扱いは御免だ！もっと立派な戦車に乗るのでなければイヤだ！とは言わず、進んで低い位置を自ら取られた。そして仕えられる歩みではなく、仕える歩みへ進まれた。この姿が示しているのは、この方の一貫したへりくだりの歩みであり、また十字架へとつながる歩みでしょう。イエス様はそのように十字架上でご自身の尊いのちを投げ出すことまでして平和の祝福を勝ち取ってくださるのです。王がその国民のために、自分の尊いのちをささげるとは、この世では考えられないことではないのでしょうか。王は大事だから、王ではなく、もっと他の人を犠牲にしようと思ったり普通は考えるのではないのでしょうか。前の章の25～28節で見ましたように、この世の支配者は人々の上に立ち、人々を従わせ、人々を仕えさせます。偉い自分のために、偉くない国民の誰かを犠牲にします。しかしイエス様はそれと全く異なる王です。この神から遣わされた神の御子なる王が、その尊いのちを国民のために贖いの代価として払うなら、その犠牲はどれだけ多くの人々を救い出すことができるでしょう。イエス様はそのようにして真の平和をもたらす王となられるのです。何よりも神との平和を人々にもたらす方とされます。また神との平和に基づくあらゆる祝福をもたらす方とされます。そのような王であることを示すために、イエス様は荷ろばの子に乗ってエルサレムへと入城されました。今、この時は分からなくても、後に弟子たちが、また信じる者たちがはっきりこの真理を悟ることができるためにと。

さて群衆はこのイエス様を見て大声で賛美しました。まず弟子たちがろばと子ろばを

連れて来て、その上に自分たちの上着をかけ、その上にイエス様が座られました。これによってイエス様が自らご自身を王として明らかに示されたことを人々は知ります。そこで非常に多くの群衆がこの行進に加わります。彼らはこれまでイエス様の言葉を聞き、そのわざを見て来ました。この方は私たちの王になってくれるのでは？と期待した人々もいましたが、イエス様はこれまではそうされませんでした。しかし今回ははっきりと王としてのご自身を示しています。この方こそエルサレムの都に入って新しい支配を打ち立ててくれるのではないか。そう考えて多くの者が自分の上着を道に敷いたり、木の枝を取って道に敷きました。そして叫びました。「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」 「ホサナ」とは「主よ、お救いください」という意味の言葉で、この頃には賛美のことばとして定着していたようです。「ダビデの子」はこれまでも出て来ましたようにメシヤ称号です。「主の御名によって来られる方に」とは、主の代理人として来られて、主の御心を推し進める主の使い、メシヤのことです。「いと高き所に」は、クリスマスの夜の天使たちの賛美を彷彿とさせる言葉です。人々はイエス様の前を行く者も後を行く者も熱狂的に賛美の声を上げました。こうしてイエス様はついにエルサレムの都へと入城されたのです。

一方のエルサレムに住む人々はこの騒ぎに驚きます。そして「この人は誰なのか」と言いました。多くのエルサレム市民にとっては、イエス様はまだ未知の人物だったのでしょう。「一体何の騒ぎか。この人は誰なのか」と彼らは言いました。これに対してガリラヤから上って来た群衆は答えました。「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ。」と。多少ここには彼らの誇る気持ちがあったのでしょう。この人は我々の地方から出た預言者なのだ、と。この「預言者」という言葉には冠詞が付いていますから、申命記でモーセが語った「あの預言者」を指す意味があったかもしれません。あるいはそこまでではなくても、神の器に対する最高の賛辞として「預言者」という言葉を使ったのかもしれません。興味深いことは、この21章最後の46節で祭司長や律法学者たちはイエス様を捕らえようとしたが、群衆がイエス様を「預言者」として認めていたために、それができなかつたと記されていることです。この時点ではイエス様をそのように高く見る人が大勢いたのです。

以上の記事を通して、私たちは今朝改めてイエス様はどんな王であられるかを心に留めたいと思います。イエス様はろばの子に乗って、荷ろばの子に乗って、エルサレムへ入られました。もし私たちがこれを第三者の目で見ると、特にエルサレム市民として

眺めたらどうだったでしょう。何と愚かな馬鹿馬鹿しいことをしている人たちかと思いたくなる光景がそこにあったのではないのでしょうか。しかしイエス様は辱めをもともされず、仕えるために来た王として、進んでご自身をこのように示されました。これからどんなに厳しい戦いがイエス様の前には待っていることでしょうか。この日は日曜日、十字架にかかるまではあと5日間です。十字架はもうこの週の事です。イエス様はともすれば顔をそむけたいくなる誘惑と戦いながら、エルサレムに向かって、前へ、前へと進んで来られました。そしてそこで命までもささげて仕える王として、ろばの子に乗ってエルサレムへ入城してくださいました。私たちはついにここまで来てくださったまことの王の姿を見て、ひれ伏して感謝し、この方こそを礼拝したいと思います。

そして私たちはこの方がこの後のエルサレムでの最後の一週間の戦いを通して、今や約束の支配、真の平和を勝ち取ってくださったことを知っています。それは何よりも神との平和であり、またその神との平和に基づくどこまでも広がる平和の祝福です。イエス様は復活後、この福音書の28章18節でこう言われます。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」十字架を通して、この支配をイエス様は現実に勝ち取られました。なお世の終わりまで理不尽なことがあります、それでもすべての事柄の上にこの方は奇しい主権の御手を持っておられます。そして最後の日にはこの方が真の王であることがすべての人に明らかに示される時が来ます。すなわちキリストの再臨の日です。その日にはすべての人が、ここにあるのと同じ言葉、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言うようになるとルカの福音書13章35節に記されています。またピリピ人への手紙2章11節にも「すべての舌が『イエス・キリストは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰する」と言われています。これはすべての人がクリスチャンになるという意味ではありませんが、すべての人はこのイエス・キリストこそまことの王であるとはっきり認めるようになる、あるいは認めざるを得ないようにされる。そしてこの方に誉れと賛美が永遠に帰されるようになるのです。

今日の箇所はそのやがての日の賛美を先取りする意味も持っています。これは最後の日の賛美の前触れでもあるのです。私たちはろばの子に乗ってエルサレムに入城されたイエス様のお姿を、見る目を持って見るようにされた者たちとして、心からの感謝と愛を告白して、この賛美の声に加わる者でありたいと思います。そしてなお続いて記されるイエス様の一週間の戦いの記事を読み、この王がくださるまことの平和に生かされながら、最後の日に向かって一層高らかにこの賛美をまことの王に向かってささげる歩み

へ導かれます。